
被虐の鬼才メイジ

出雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

被虐の鬼才メイジ

【著者名】

NZノード

【作者名】

出雲

【あらすじ】

一度目の転生先はゼロ魔の世界
一度は頂点に君臨した者が。。。
持ち前の能力を使って切り抜けるか?
それとも豆腐メンタルチートは潰されてしまうのか?

プロローグ（前書き）

敢えて何も言いません
序盤は暗い話です

プロローグ

? 「あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！」

『ピカッと光つたと思つたらFFのタイタンのように這いついていた
人の居る真っ白な空間に居た』

な… 何を言つてゐのかわからねーと思つが
おれも 何が起こったのかわからなかつた
頭がどうにかなりそうだつた…

催眠術だとか超スピードだとか

そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ

もつと恐ろしいものの 片鱗を味わつたぜ…』

神 side

神「そうか。吾輩はネ申である。名前は沢山ある。君は死んだのだ」

「ゑ れれれ冷静になれ」

神「冷静になるのは君だよ 君は吾輩が殺した。君を生かしておく
のを危険と判断した。よつて違う世界に転生とする。」

ほんとは部下のミスですサー…セン

「」

目の前の御靈は心当たりがあるのか絶句してしまつた。

? side

思い出せない…自分の名前…家族…友人…同僚
俺は医師だった。

これはちゃんと覚えてる。

知識もちゃんとある。

だが人間関係は全て記憶から消えていた。

先ずは冷静になって状況を把握しよう。

（？整理中）

「君には転生するにあたり、特別な才能を「与えよう。努力次第で無限に伸びる能力、強靭な精神力、超精密妄想能力。面倒なので記憶も持ち越しどする。いつか吾輩をも超えるやもしれんな。カツカツ力」

素晴らしい神様です。私は貴方を信仰しまじょうかな

「ふむ、ならばこのありがたい壺を100万円でどうだ？」

「エセ新興宗教みたいな事はやめてください。」

「カツカツカ面白いのう。ではいてらへノシ」

これが全ての発端だった。
私が生を受けた世界は
ドランクエストの世界のようだった。

「貴方の名はピサロです」
見たところ魔界つまり…私は…あのピサロだろ？
ラスボスか？
勇者が怖すぎる

私はその後、ピサロとして生き

ロザリーに恋し

勇者に討たれて死んだ

進化の秘宝を極めて

そのままの姿でパワーアップを図り、全力のエスターク先輩並みにはなったが

倒しても倒してもゾンビのよつにやつてくる勇者になす術は無かつた。

そして我が人生は終わり

再び神様ルーム

神「ういー」「苦労さまー」

ピ「あるえええ！？ 神様変わってるー。」

神「前の神は君をミスで殺したから責任取つて首になりますた。これからは北 大学の神ことロベルトがここ担当です。」

ピ「ああ～細菌学の開祖様…でしたつけ？ パスツールのライバルだつたといふ。」

神「そうじゃ、君をまた転生させる。能力記憶持ち越しだ。」

ピ「おう、わかつた。助かるよ… 因みにどんな世界なのです？」

神「これだ」

神が手に持つてゐる漫画『ゼロの使い魔』

ピ「ゼロに転生する前の世界で高校生の時にアニメを見ていたな

あ… 1000年前くらいだな。記憶訓練してたら絶対記憶的なものが身についたでござる。」

「ならば話が早い よりしげならば転生だ。容姿もそのままだから安心せい！」

暖かい光が包み込むと同時にピサロは意識を手放した。

プロローグ（後書き）

やつひめひつたゞ

第一章～第1話大貴族の子（前書き）

望まれない子の誕生です

第一章～第1話大貴族の子

「おめでとうございます！元気な女の子ですよ
なんか体がベタベタする…この感覚はやつぱり慣れん

タオルで拭かれ、包まれたようだ。
暖かい…

「我が子をよく見せてもらいたい。」

「は、はい！只今！」

親は貴族か…良かつた良かつた
親バカだと嬉しいぜ

「ん？…これは…尻尾に…獸耳？…これは…なんという事だ…大々的に発表したのに隠すわけにはいかぬが…暫く屋敷に閉じこめておかなば。」

今オヤジ何といった？

明らか人間じゃないな…私は
殺されはしないのは
安心した。

「ああ…なんという事でしょう…我が子が…悪夢だわ…」

父ーレイヴン・ド・マルセイユ視点

待ち望んだ我が子
期待に胸を膨らませ
始祖ブリミルに祈りを捧げながら妻の手を握る

そして遂に我が子が生まれた。

最初は天にも昇る気持ちだった。

だが私は地獄の底にたたき落とされた

我が家は耳が普通の位置に無く、犬のような耳が。 おまけに尻尾がついていた。

こんなのがバレては

マルセイユ家の威信が地に落ちる

それだけは避けたい

殺すのもあんなに大見得切つた手前不可能だ。

地下室に軟禁して生かしておく。

社交界には帽子を被せていけば良いだろう

ふふふ…あッハハハハ

出来損ないめ…

第一章～第1話大貴族の子（後書き）

主人公詳細

名前：フィオーレ・ピサロ・マルセイユ性別：女
ガリア貴族 マルセイユ大公家の長女

前世はピサロでチート能力持ちで記憶引き継ぎといったチート具合
だが
ピサロ様は優しすぎた

容姿は、サラサラな銀髪に薫色の瞳。
反則のふつくしさ
尻尾と狐耳があり、そのおかげで両親に良く思われていない。
豆腐メンタル

第一話～弟誕生～（前書き）

フイオーレ視点で進んでいきます

第一話～弟誕生から半年後～

私は フィオーレ・ピサロ・マルセイユは今年で5歳になりました。
見事にチートでしたとも、ええ
父や母も優しくしてくれますし。
いつも黒いハットを被っています。
もうローブも買つてもらいましたので着ています。

3歳のころ魔法を習うように言われました。

師はとうずくに父が教えてくれました。
初日で土・水はスクウェアに 火・風は……まあチート魔法あるか
ら良いか。

要するに全く使えなかつたです。

父が忌々しげに私を見たような気がするけど
気のせいでしょう。

900年くらい前：日本国民だった頃は自衛隊の医官で内科医した
から臨床はお手のものです。
治癒が得意になりました！

そんなんある口私に弟 シャルル・ジークフリート・マルセイユがで
きました。

とおさまたかあさまは大層お喜びになられた。

普通の子でしかも男

私は魔法の才能があつたためか、その子にも凄い期待
私は弟が出来たのが何故か嬉しくて
少し夜更かししたが寝た

私の扱いはこの日を境に急変した。

第一話～弟誕生から平穏～（後書き）

父

レイヴン・ド・マルセイユ

プライドが相當高く、名譽を一番に欲しがる。

子爵の家だったマルセイユ家を一代で大公家までにさせた。ジョゼフの親友であり、優秀だが足元を掬われることもしばしば平民には人気がある

カリスマまだ漏れイケメンリア充野郎

土・風のスクウェア

火のトライアングル

水のドット

母

エレーゼ・オブ・オックスフォード・マルセイユ

アルビオンのオックスフォード公爵家の次女だったが、ガリアのマ
ルセイユ家に嫁ぐ レイヴン一直線でベタ惚れしている。

水のスクウェア

火・土・風のトライアングル

両親も規格外なのです

弟

アンリ・ジークフリート・マルセイユ

あまりというか全くフィオーレに似ていない

普通の顔

普通の普通

だがチエスは強い

ジヨゼフを手こずらせる程の腕前

魔法は

火水土
… ×

風
… ドット

フィオーレの実力を妬む。

第三話～被虐のハイオーレ（前書き）

前の後書きの訂正

アンリ シャルル

ミスですよ。こ

第三話～被虐のフイオーレ

「ん……う…………ゑ？」

朝余りにも寒かつたので起きたら、私は地下牢に閉じ込められていた。

鍊金したであろう鉄の首輪が着けられていて、ぶつとて且つ重い鎖で繋がっていた。

魔法はチートだが、身体能力は普通の少女なのだ。

前世みたいな怪力は無い

牢の中には

トイレ、餌皿、犬小屋があつた。

布団など無い

私は年のために魔法が使えるか確かめた

鍊金で、ゴーレムを創ろうとしたが

「あれ？あれ！？魔法が…使えるない」

何度も試すが使えなかつた。

「メラ」

違う魔法も試してみたが無理だつた。

「え！？何で！？何で使えない！？」

フィオーレは珍しく焦つた

貴族二ート生活で暢気な性格になつていたが、自分は魔法と能力が

無ければチートでも何でもない。

ただの5歳の少女なのだ。

そう考へると、途端に怖くなつた

「フィオーレ…」

「とおさま！？助けて！此処から出して…！」

「貴様は私たちの子ではない」

「そんな…どうして…」

「どうしてだと？教えてやるわ。貴様の存在が由緒正しきマルセイ

ユ家にとつて邪魔なんだよ！－亜人がまともな生活送れただけでも感謝しな。魔法は首輪がある限り使えんからな！－クソ女狐めが！」

「

「あ…あ…嫌アアあアあアア！－あ、つ…なん…で…」

レイヴンは牢の中にゴーレムを作り、フィオーレを殴り倒した。

「う…痛い…なんで…なんで…痛いよ…」

「忌々しい…」

レイヴンは憎々しげに倒れているフィオーレを睨みつけると、階段を上がつていった。

フィオーレには分からなかつた。

今まで優しかつた両親が何でこんな事をするのか分からなかつた理解したくなかった

「…」

痛みが引いてくると、犬小屋の中の布団にぐるまつて泣いた自分のふさふさもつふもふな尻尾が憎かつた。

心なしか耳が垂れていた。

前世が魔王的なものでも今は魔法がチートな5歳児記憶が残つても

チート生活で幼児退行

してたフィオーレは、ただの 5歳児だつた。

魔法が使えればチートだが封じられれば手も足も出ない。

フィオーレの地獄はまだ始まつたばかりだつた

第三話～被虐のフイオーレ（後書き）

フイオーレはニート生活でふぬけの豆腐メンタルになりました。

容姿はタバサの髪が銀で、目が赤っぽくて
ふさふさもつふもふの白い尻尾に犬耳です。
碌に栄養が取れてなく、ちびっ子です。

首輪取ればチートですが…

第4話～弟のペッパー（繪書も）

少し怠けます

第4話～弟のペット～

私フィオーレは12歳になりました
正直言つてもう生きるの疲れました
あ、鬼畜親父がきました
鬱です…もつ嫌だ

「おい、フィオーレ…喜べ…一度外に出してやる」

あの鬼畜野郎の事です…どうせ酷い目に遭わされるんだ…

ガチャ

やめて…来ないで

「立て！」

「う…っ…あ…」

鎖を引っ張られたら何故か首輪が締まりました
言つことを聞いて立ち上がると緩みました
私は黙つて従つしか無いみたいですね…

私が連れて来られた部屋には5歳くらいの男の子が居ました。

「おお…シャルル、ペットを連れてきたぞ。好きに扱うが良い」

「やつたー！とおさま大好き！」

普通の家族

見ていたら苦しくなりました。

私はあれから七年…毎日虐待され続けました。

私が喘息だと分かると、魔法で家中のハウスダストを地下に送つて

きました。発作を起こし、死にそうになると水の秘薬で無理矢理立ち直られます。」）飯は無しです…

前世で捨食の法を使ってなかつたら餓死してました。何故死なないか鬼畜は考えてましたが、私は悪魔の子だという変な結論にたどり着いたようです。毎日癌だらけになるまで殴られ水の秘薬で治される。

私は壊れかけていました。

私が考えている間に話が終わつたようでもちびっ子に鎖を引かれています。私は黙つて従うしか…「おい犬！」

「狐です…」

「おい狐！」

こいつ…馬鹿だな？

あ、あれ？鎖を外した？「お前は首輪だけあれば安全だとおさまが言つていた。」

「あ、うつー？…な、何をなさるのですか！」

ちびっ子は突然蠅たたきのよつなもので思い切り叩いてきた。

「つぬさい犬、とおさまが叩くと喜ぶつて言つてた」

ちびっ子に何吹き込んでんだよ…別に喜ばないよ…

パン！パン！パン！

「や、やめてください！痛いです！」

「口答えするな！僕は偉いんだぞー！」

「……」

私がボロボロになるまでこれは続きました
もう声をあげる気力すらありません。

何かを無理矢理飲まれました
傷が治つていきます。

水の秘薬でしょう…

それにしてもこんなに水の秘薬を用意できるとは… IJの家の金は底
無しですか

「ひやあ！？ど、どこさわって…」

「尻尾だが何か？もつふもふだな」

突然尻尾をさわつてきました。

尻尾は弱いんですね…

「や、やめて…ぐだわい」

「だが断る」

「うう…っ」

私は必死で耐えました

無い胸を触られたりもしました。

その度に絶壁と馬鹿にされ…

別に良いじゃないですか…どうでも良いじゃないですか…

夜中には叩き起こされて鬼畜野郎に虐待されます。

昼間はちびっ子に虐められます

私はもう壊れていきました。

感情も無くなり、何の反応もしなくなりました。そんな私に飽きた
のか、私は13歳の春

トリステイン魔法学院に留学になりました。

体裁は留学ですが要するに厄介払いです。首輪を外してもうえまし
た：

殺してやりたい…だけど…怖くてできなかつた

前世で人間なんて何も思わず殺してきたけど今は怖かつた。

私はいつも帽子を外さないと誓いました。

外したらまた…虐められます…

それは嫌です…

やっとあの二人から解放されます。

馬車に乗り込むと、私はトリストainへ向かいました。

第4話～弟のペット～（後書き）

フィオーレは青いフレームの眼鏡を買いました

第五話～入学と東の間の平穏～（前書き）

キュルケとタバサ登場

第五話／入学と束の間の平穏

「おい、到着だ。起きろ」

パシッ！

「つー？」

護衛に文字通り叩き起こされた私は魔法で荷物を浮かせ、寮まで行つた

寮の前は人混みが出来ていて怖かつた

夕方まで待ち、人がまばらになつた頃に部屋まで行つた。

私の杖はレイピアみたいな形にしてある。

隣人の名前をチェックしておく。

タバサとツェルプストーという人らしい。

怖い人じやないと良いな…

荷物の整理を済ませると、暇だし図書館に行こうと部屋を出る。

私はこの学院にはただのピサロとして入学した。明日は入学式らしい。

なんか代表挨拶するみたい。

唯一のスクウェアだとか…

ドアを開けると隣人も出てきた。

「・・・色違い」

それが彼女の第一声だった

確かに似ていた

というか髪の色以外では眼鏡の色と杖と帽子しか見分けられるものが無い

二人とも本を持っていた。

瓜二つだった。

「・・・名前：タバサ」

手を差し出してきた

「…ピサロ」

私は手を握った

その時もう一人の隣人が出てきた。

「双子？」

キュルケは混乱していた色違いでそつくりなのが握手をしている。

2人は隣人らしい

片方は黒い帽子を被っていた

「…違う」

タバサが言つとキュルケは面白いものを見つけたという顔をした。

「私はゲルマニアのキュルケ・フォン・ツェルプストー。微熱のキ

ュルケよ。宜しく」

キュルケは微笑みながら手を出してきた。

「…タバサ」

先にタバサが握り返した「…ピサロ」

次にフィオーレが握り返した

「二人とも偽名っぽいわ…」「二人はどこ出身なの？」「…ガリア」

あ、彼つた

にしても本当にそつくり…

二人を無理矢理部屋に連れ込もうとする

「…図書館」

タバサは抵抗したが、ピサロはされるがままにされている。

ピサロが悲しげな表情を浮かべてたのが気になつたがタバサを抑え
る。

幼い二人はキュルケの力にかなわずに引きずられていった。

第五話～入学と東の間の平穏～（後書き）

ぬるふあ

第6話～入学式前日（前書き）

こここのタバサは天才故に少し考えが飛んでいます。

第6話／入学式前日

キュルケの部屋に連れ込まれたピサロとタバサは突然の事に困惑していた。

「まあ親睦を深めましょう。偶然会ったのも何かの縁です。自己紹介の続きでもしましょう?」

キュルケがそう言つとタバサもピサロも無反応だった。

「私は火のトライアングルよ。年は17、宜しく。」

キュルケが微笑みながら言つと、若干ピサロの雰囲気が和らいだような気がした。

「…風のトライアングル」

タバサが言つと、ピサロに視線が集まる

「土・水のスクウェア… 13歳」

「ゑー?」

キュルケは露骨に驚いて、タバサはピサロを凝視した。

「その年でスクウェアって…」「……凄い」

当の本人は無表情で固まっている。

「改めて宜しく。仲良くしましょ?」

「…「クン」

「はい」

タバサが頷き、ピサロが返事をする。

「そういえば…室内なんだし帽子とりなよ」

「え…あ…その…」

帽子を両手で抑えて部屋の隅に座り込んでしまった。

酷く怯えているように見える。

心なしか震えているような…

ピサロは恐れていた。

折角…初めて仲良くなれそうだったのに
耳を見られたら絶対に虐められる
どうすれば良いか分からずに私は丸まつた。

キュルケとタバサは目を合わせると、ピサロに近付いてみた。
ピサロはまるで怪物を見るような目で一人を見た
二人は軽くショックを受けたが、何故これほど人を恐れるのか気になつた。

ハゲなのか？ そうなのか？

二人は同じことを考えていた。

「…ハゲても大丈夫」

ゲツ…タバサストレートすぎる。

「…ち、違う」

ピサロも流石にこれは否定した。

「じゃあ何なの？ 親友の私たちにも言えないの？ 何であろううと変わらないから大丈夫。」

キュルケがしゃがんで微笑みながうピサロに言った

「…会つたばかり」

タバサが冷静に突っ込んだが、キュルケはスルーした。「ほ、本当に？」

ピサロが帽子を押さえながら涙目上目遣いで二人を見る。

ゴフツ

燃えたわ…いえ、萌えた

あの無愛想なこの子がねえ…

「本当よ」

キュルケは精一杯優しそうに答えた。

この子…使える

仲良くなつておくれ

「…「クン」

タバサも頷いた

ピサロは2人を信用して、帽子を恐る恐る取った
そこについたのは…

垂れた獸耳だった。

ピサロは目を瞑つて体を強ばらせた。

「エ？ この子… そういう事だったの…」

「・・・かわいい」

キュルケは全てを理解した。慈しむよつな… 哀れむよつな視線をピ
サロに向けた

タバサは決めた

この生き物を自分のものにすると
毎日もふもふして暮らそうと
いつその事妹にしてしまおう。

瓜一つだし… 強いし…

「この学院に居れば大丈夫よ。もう怖がらなくて大丈夫。辛かつた
わね？ よく耐えたわ。もう大丈夫だから。」
キュルケはピサロを抱きしめながら頭を撫でた。

「……グスツ」

ピサロは泣いていた

しっかりとキュルケに抱きついて暫く泣いていた

「ありがと…キュルケさん」

「良いのよ、友達だから」キュルケはピサロの頭を撫でながら言った

頭を撫でられてピサロは気持ちよむわかつに手を組めている。

「・・・私空氣」

タバサはどう接して良いか分からなかつた。

自分の対人スキルの無さには絶望した。

まずは話しかけてみよう…

キユルケから取らないと

「・・・キユルケずるい」

「ん？タバサ？そういう事ね。そういう事に違いないわ」「・・・話はちゃんと聞くべき」

タバサはキユルケに抱き寄せられて頭を撫でられていた。キユルケが勘違いしただけなのだが、悪い気はしなかつた。ピサロは泣き止むと、再び帽子を被つた。

「この事は誰にも言わないでください…お願いします。」「わかつた、約束するよ」「…「クン」

この日は三人で図書館に行つたりピサロのスピーチの原稿を考えたりした。

タバサの希望で、ピサロはタバサと一緒に寝る事になつた。

タバサの部屋

二人はタバサの部屋で黙々と本を読んでいた。

突然タバサが近寄ってきたと思つたら手際よく、ピサロに革製の首輪を取り付け帽子を取り上げた。

「ふえ！？ や、やめてください…お願いします…」

「・・・害は無い…かわいい」

首輪には『タバサ』と

書いてあつた。

「・・・ピサロは私のもの・・・もう寝る」

タバサとピサロは寝間着に着替え、ベッドに潜り込んだ。

「・・・尻尾・・・もふもふ」

「はうつ・・・尻尾は駄目です・・・」

タバサが尻尾をもふもふしだす。
柔らかい布団に感動していたが、尻尾をもふもふされて寝るピサロ
ではなかつた。

全身がムズムズした。

タバサは残念そうな顔をするが、止めてくれた

「・・・おやすみ」

ピサロは一つの間にか寝てしまつたようだ。

「・・・ぐ・・・あ・・・やめて・・・ぐださい・・・何で・・・何で・・・」

突然、ピサロがうなされ始めた。

彼女も私みたいに悪夢を見るのだろうか

私はピサロを抱きしめた。

いつしか私も眠りに落ちた

第6話～入学式前日（後書き）

あばばばば

私なんかの作品を読んでいただきありがとうございます。
稚拙な文章ですが、精進したいと思います。

因みに私は虐待やいじめは絶対に許しません。

第7話 入学と苦惱（前書き）

「レイヴンだ。」

「おお…レイヴンか…入れ」

私は今王宮に出向き久しぶりに親友ジョゼフと会った。

事の手筈を報告する為だ。

「犬はトリステインへ留学。今夜手紙を送りました。幼い頃より身に恐怖を刻み込んでおいた…あいつはいくら強かろうと私に逆らうのは不可能であります…あいつは必ず保身に走る…」

「そうだな…マルセイユ家と犬は関係無いしな…私は何も見てないし聞いてない。好きにするがよい…その代わり…分かるな？」

「陛下もワルよのう…」

「フハハハハ！」

「レイヴンよ…久しぶりにチェスでもやるか？」

「負けませんよ？」

「望む所…」

（

2勝3敗か…

「強くなつたな…だが詰めが甘い所は治つてないよつだな。レイヴ

ンよ…」

「ぐ…負けたか…」

「懐かしいな」

「ああ…そうだな」

「お互い変わつたものだ」「全くだ…」

精々苦じめ……フィオーレメ……

第7話 入学と苦悩

「ん…?」

朝目が覚めると、目の前が真っ暗だった。
暖かいのと柔らかいあといい匂い

私が厄介払いされてから1日

厄介払いされて良かつた。

あんな家帰りたくない。私はなんとか脱出すると、首輪を外しローブに着替えると帽子を被り眼鏡を掛け杖をさした。
先ず挨拶の紙取つてこないと…

タバサはまだ寝てるみたい。

不思議な雰囲気な…色違ひな人…

タバサの部屋を出て、自分の部屋に入ると、梟が一羽机の上に居た。
足に手紙がくくりつけてある。

そういえば窓開け放しだったのを思い出した。梟の手紙を取ると、
梟を返して窓を閉める。

手紙を開いてみたら私は愕然とした。

「

私が貴様をただで留学させる訳が無からう?

学費などマルセイユ家にとつては微々たるものだが私は貴様なん
ぞにやる財は持ち合わせていない。

だが働くなら話は別だ。王宮で奴隸として暮らすか学院で任務をこ
なすか選べ

尚貴様の正体がバレようがマルセイユ家は関係ない。だが逃げ出
した場合は…分かるな?

任務

- ・タバサの監視及び報告

・不穏な動きがあつた場合暗殺とする。

- ・指定した者の暗殺

貴様は優秀（笑）だから紙など見ないでも覚えるであろう。私は貴様をいつも監視している。

レイヴン・ド・マルセイユ

」

「タバサ…ごめんなさい…」

私は学院の任務を取る事にした。

自分は弱い人間だった

だが1日話した程度の人間より自分が大切に決まっている。

「たかが…1日…っ」

気づいたら私は泣いていた。

そして手紙は自然に燃えて灰になつた

♪入学式

「のうコルベール君

「何です？」

「今年は優秀な生徒が多いのう…」

「ミスキュルケにミスタバサ、そして…ミスピサロ…あの年でスクウェアだなんて聞いた事が無い…」

「ふむ…何事も無ければよいのじゃが…」

「そうですね…ミスタバサとミスピサロに関する情報が全くと言って良い程無いですから…」

「新入生代表挨拶

ミス ピサロ お願いします

「皆さん、『入学おめでとう』がります。挨拶を任せましたピサロで『』がります。本日は皆さんの『』入学を『』

入学式も無事に終わり、各自ハイな気分で寮に戻っていく。

私も寮に戻ろうとした

ら袖を引っ張られた。

「・・・もふもふ」

「つ！？」

タバサを見た瞬間胸が苦しくなった

私は・・・私は・・・最低だ...

「・・・怖くない。大丈夫」 やめて 優しくしないで...

「・・・私が居る」

私はされるがままタバサに引っ張られていく。

丁度中庭を通りかかった頃

「そこの青い方？」

明らかにタバサの事だろうけど、一人とも無視したら声の主は進路を塞ぐように立った。

「・・・邪魔」

「貴女がミスマタバサね？決闘を申し込みます。私はヴィリエ・ド・ロレーヌ」

「・・・ピサロはトがつて」 「う、うん…」

タバサとヴィリエの決闘を見ていた。
タバサがヴィリエを圧倒していた。
なんか戦い慣れてるような…

「ミスピサロだね？」

「ん？」

「私はジユール・ド・ウォレル…君に決闘を申し込む
士のトライアングルだ」

「は、はあ…」

彼は鉄のゴーレムを鍊金した。

「来ないなら此方からいくぞ！」

私は恐怖で動けなかつた

初めて虐待された時の事が頭をよぎつた。

「う、つ……ドサツ」

鉄のゴーレムに腹を殴られて私は倒れた。

「ゴホッ … ゴホッ …」

「スクウェアも大したことないな。」

ゴーレムは崩れ、後には痛みに耐える私を残し皆帰つた。

「ピサロ！？」

私は薄れゆく意識の中で私は自分を憎んだ。
そして私は意識を手放した。

第7話～入学と苦悩～（後書き）

わざわざ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4397z/>

被虐の鬼才メイジ

2011年12月15日22時52分発行